

研究ノート

老年看護学実習指導における病棟看護師による関わりの実際

兎澤恵子¹⁾・青柳直樹²⁾・保坂由美子³⁾・剣持淳子²⁾
 武井直樹²⁾・林 かおり²⁾・阿部きく枝²⁾・前野博子²⁾
 高橋三枝²⁾・伊藤まゆみ³⁾・小竹タミ江²⁾

Investigation into the actual condition by Relation of Nurses
in Gerontological Nursing Training

Keiko TOZAWA¹⁾, Naoki AOYAGI²⁾, Yumiko HOSAKA³⁾, Junko KENMOTI²⁾
 Naoki TAKEI²⁾, Kaori HAYASHI, Kikue ABE²⁾, Hiroko MAENO²⁾
 Mie TAKAHASHI²⁾, Mayumi ITO³⁾, Tamie KOTAKE²⁾

要 旨

本研究の目的は、看護短期大学の老年看護学実習における臨地実習指導の質向上を目指して、病棟看護師による実習指導状況の一側面を把握するために実態調査を行い、今後の臨地実習指導への示唆を得ることを目的とした。

方法は、実習を行っているH病院4つの病棟の看護師および准看護師合計40名に、留置調査法によるアンケート調査を実施した。分析方法は、調査結果は単純集計しカイ二乗検定、また、学生への関わりと職種間の比較に関してはクロス集計し、Pearsonの相関係数を用いた。

その結果、学生への関わりは93%の看護職が行っており、学生との関わりが多いほど困難も多いが自己成長につながる利点があると感じていることがわかった。また指導を受けている援助技術は、水準1が90%、水準2が10%であり、高齢者への日常生活援助を中心にした項目であった。自由記述内容は、[指導への意欲] [行動計画の具体化] [実習への意欲] [周囲への配慮不足] [指導時の対応] の5項目から構成されていることが明らかになった。

I. はじめに

看護学実習とは、各看護学の講義や演習により得た科学的知識・技術を組み合わせ、実際に対象に受け入れやすいものとして提供することを、その人の健康レベル・生命現象・環境とのかかわり・行動変容などの過程を通して、統合し、深めていく授業である¹⁾。従って、看護は実践の科学であり、また、教育は被教育者である学生を望ましい方向に変容させていくための意図的な働きかけであり²⁾、臨地における看護学実習指導の重要性は明らかである。

本学における老年看護学実習は、実習ガイダンスを経て4週間の臨地における実習を実施しており、実習目的は、「老年看護学の対象を総合的に理解し、保健医療福祉チームの一員として、対象に応じた看護を展開できる能力を修得すること」である。実習方法は、専任教員と病棟指導者が協力して実習指導を実施している。全国の看護大学の老年看護学領域に質問紙調査を実施した結果において、専任教員が実習場所で学生指導を行う所が57.1%、専任教員と実習施設スタッフが実習場所で分担して学生指導を行う所が37.1%であり³⁾、本学は後者に属している。従って、大学側と病院

1) 群馬パース学園短期大学 2) ほたか病院 3) 群馬パース大学

の実習指導者および病棟スタッフとの連携は重要である。更に、病院の実習指導者は、学生への指導と病棟スタッフへの指導上の問題把握や助言が必要であり⁴⁾、特に、直接的な指導を行う病棟看護者はどのような関心をもって学生に関わっているか、どのような困難を抱えているかについて知ることは有効である。

本研究では、老年看護学実習における看護短期大学生への臨地実習指導者および病棟看護者の関わりの一側面から指導の実際を知り、その結果の分析・検討を通して、今後の老年看護学実習における臨地実習指導者および病棟看護者の役割と課題について示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

対象者は、老年看護学実習を受け入れているH病院の4か所の病棟に所属している実習指導者を含む病棟看護者40名(看護師22名及び准看護師18名)、年齢は20代から50代までで平均年齢34(±10.33)歳、男性10名および女性30名を対象とした。ここで言う実習指導者とは、主に「県主催の実習指導者講習会(2か月)」、「厚生労働省主催の実習指導者講習会(6か月)」を受講した者をいう。

2. 調査期間

2006年11月15日から2007年1月30日まで。

3. 調査方法

留置調査法によるアンケート調査を実施した。

「老年看護学実習指導に関するアンケート調査」(以下、アンケート調査という)のアンケート内容は、①スタッフが学生とどのような場面で関わったか、その関わりからどのような困難があったか、②計画発表時や報告時の対応で困ったことはあったか、③援助や処置時の対応で困ったことはあったか、④患者からの不満や苦情はあったか、⑤学生の実習記録に対する興味はあるか、⑥実習記録を読んだことがあったか、⑦学生について感じたこと、先輩としての自分に気付いたことはあったかについて、その有無を回答し、具体的な内容については自由記載の欄を設けた。

4. 分析方法

7項目のアンケート調査結果について単純集計し

た。また、「学生への関わりの有無」および「看護職種別」と他の質問内容についてクロス集計し、相互の関係を比較検討した(pearsonの相関関係)。次に、関わり場面となった援助技術については、延べ件数と項目別件数を集計し、「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書(看護問題研究会、2004)」(以後、検討会報告という)に示されている「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術水準」による分類に合わせて学生が受けた指導技術水準を確認した。更に、自由記載内容について、共同研究者と合意を得ながら大中小の 카테고リーに分類し、検討資料とした。

なお、検定には統計学的パッケージSPSS11.0を用いた。

5. 老年看護学実習の概略

1) 実習目標

①高齢者を総合的に理解し、看護問題を明確にできる、②高齢者の自立を考慮し、個性性を踏まえた計画を立案・実施・評価できる、③看護師としての態度を身につけることができる、の3つの実習目標と20項目の行動目標を設定している。

2) 実習方法

①G県内H病院の一般病棟1か所および療養型病棟2か所において3週間、更に介護老人保健施設において1週間、各病棟の実習指導者1名と教員2名で10~16名(1グループ5~6名)を指導する。

②実習の実際は、実習直前オリエンテーション、実習直前技術演習(右片麻痺患者を状況設定した部分ケア、車椅子操作方法と移動移送)、事前実習課題レポート提出(高齢者の特性、疾患と検査・治療・看護、リハビリテーション、高齢者に発生しやすい事故、介護保険制度)を行った後、病棟における受け持ち患者1名への看護展開を実施する。病棟実習中は毎日カンファレンスを実施し、週末の学習評価テストと実習最終日の実習まとめ発表を経て終了となる。

6. 倫理的配慮

「老年看護学実習指導に関するアンケート調査」の活用については、事前に研究目的と方法を、公表については病院管理者および実習病棟スタッフに文書をもって説明と同意を得た。留置法により、アンケート用紙配布の10日後に回収箱を回収した。研究参加にあたっては、自由意志により記入し、不参加であったと

しても個人の業務評価対象にならないことを説明し、了解を得た。データは研究論文の完成時に破棄することを伝えた。

III. 結 果

1. 基礎調査結果

調査対象者の基礎資料は、表1に示したように、40名の年齢比較では30歳代13名(32.5%)と最も多く、次に40歳代11名(27.5%)、20歳代9名(22.5%)、50歳代7名(17.5%)であった。性別では、男性10名(25.0%)、女性30名(75.5%)。職種別では、看護師22名(55.0%)、准看護師18名(45.0%)であり、看護

師は20~30歳代で55%中45%をしめ、准看護師は40~50歳代で45%中35%をしめた。

2. 学生との関わりの有無と職種別の調査結果

「学生との関わり」については、表2に示すとおり、学生との関わり「有」が37名(92.5%)、「無」が3名(7.5%)であった。職種別では、学生との関わり「有」は看護師21名、准看護師16名であり、学生との関わり「無」はわずかに看護師1名、准看護師2名で、看護職の多くが学生と関わっていた。

「計画発表や報告時の困難」については、困難「有」が24名(60.0%)、困難「無」が16名(40.0%)であった。また、「学生との関わり」と「計画発表や報告時の

表1 アンケート調査の基礎資料

n = 40

質問項目	対象者別			
	合計	看護師	准看護師	
年 齢	20~29代	9 (22.5%)	7 (17.5%)	2 (5.0%)
	30~39代	13 (32.5%)	11 (27.5%)	2 (5.0%)
	40~49代	11 (27.5%)	3 (7.5%)	8 (20.0%)
	50~59代	7 (17.5%)	1 (2.5%)	6 (15.0%)
性 別	男 性	10 (25.0%)	9 (22.5%)	1 (2.5%)
	女 性	30 (75.0%)	13 (32.5%)	17 (42.5%)
合 計	40 (100.0%)	22 (55.0%)	18 (45.0%)	

人数 (%)

表2 臨地実習指導における学生との関わりの有無とその内容

n = 40

質問項目	合計	学生との関わりの有無			職種別比較			
		有 (n=37)	無 (n=3)	γ 値	看護師 (n=22)	准看護師 (n=18)	γ 値	
学生との関わりの有無	有	37(92.5%)	21	0	0.446	21	16	0.446
	無	3(7.5%)	16	3		1	2	
計画発表や報告時の困難	有	24(60.0%)	24	0	0.027*	16	8	0.072
	無	16(40.0%)	13	3		6	10	
援助や処置中の対応の困難	有	12(30.0%)	12	0	0.249	11	1	0.002**
	無	28(70.0%)	25	3		11	17	
患者からの不満や苦情	有	2(5.0%)	2	0	0.689	2	0	0.199
	無	38(95.0%)	35	3		20	18	
学生の実習記録への興味	有	19(47.5%)	19	0	0.091	14	5	0.22
	無	21(52.5%)	18	3		8	13	
実習記録を読んだことがある	有	13(32.5%)	12	1	0.975	9	4	0.024*
	無	27(67.5%)	25	2		13	14	
先輩として感じたこと	有	24(60.0%)	24	0	0.027*	18	6	0.001***
	無	16(40.0%)	13	3		4	12	

看護職による関わりの有無と職種による内容の差：Pearsonの相関係数

* $\gamma < 0.05$ ** $\gamma < 0.01$ *** $\gamma < 0.001$ 人数 (%)

困難」とは正の相関関係にあった ($\gamma < 0.05$)。

「援助や処置中の対応での困難」については、困難「有」12名 (30.0%)、困難「無」28名 (70%) であった。また、「職種別」と「援助や処置中の対応困難」とは正の相関関係にあった ($\gamma < 0.01$)。

「患者からの不満や苦情」については、苦情「有」が2名 (5%)、苦情「無」が38名 (95%) で患者からの声を聞いているのはわずかであることがわかった。

「学生の実習記録への興味」については、興味「有」

が19名 (47.5%) で「無」が21 (52.5%) であった。

「実習記録を読んだことがある」については、読んだ「有」が13名 (32.5%) で、読んだ「無」が27名 (67.5%) であった。また、職業別では、看護師9名、准看護師4名であり、「実習記録を読んだことがある」と「職種間」には有意差を認めた ($\gamma < 0.05$)。

「先輩として学生や自分について感じたこと」については、感想「有」が24名 (60%)、感想「無」16名 (40%) であった。また、「先輩として学生や自分について感じたこと」

表3 基本的看護技術水準による分類と指導技術項目との比較

n = 40

基本的看護技術水準による分類項目と指導項目 13項目 (技術水準1~3)		指導件数と比率	
		水準1	水準2
1 環境調節技術	環境整備(1)	***	8(3.8%)
	リネン交換(1)		14(6.6%)
2 食事援助技術	食事介助(1)		22(10.4%)
	おやつ介助(1)	***	7(3.3%)
	経管栄養(2)		4(1.9%)
3 排泄援助技術	オムツ交換(1)		16(7.6%)
	トイレ誘導(1)	**	11(5.2%)
4 活動休息援助技術	体位変換(1)	**	7(3.3%)
	移乗移送(1)		12(5.7%)
	散歩介助(1)		1(0.5%)
5 清拭衣生活援助技術	入浴介助(1)		14(6.6%)
	全身清拭(1)		15(7.1%)
	陰部洗浄(1)	**	12(5.7%)
	口腔ケア(1)		14(6.6%)
	寝衣交換(1)	**	5(2.4%)
6 呼吸循環を整える技術	喀痰吸引(1)	***	6(2.8%)
	気管内吸引(2)		1(0.5%)
7 創傷管理技術	褥瘡処置(2)		1(0.5%) 12(5.7%)
8 与薬の技術	与薬方法(1)		0
9 救急救命処置	意識レベル把握(1)		0
10 症状生体機能管理技術	バイタルサイン測定(1)		24(11.4%)
11 感染予防の技術	ルート交換(2)	***	4(1.9%)
12 安全管理の技術	転倒・転落防止(1)		0
13 安楽確保の技術	レクリエーション(1)		1(0.5%)
14 その他	接し方など		1(2.4%)
延べ件数による比率		212(100%)	191(90.0%) 21(10.0%)
技術水準の割合 (水準3なし)			9項目(69.0%) 4項目(31.0%)

援助技術指導項目間の比較：カイ2乗検定 * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$ 人数(%)

と「学生との関わり」「有」には有意差を認め ($\gamma < 0.05$)、「先輩として学生や自分に感じたこと」と「職種間」にも正の相関関係があった ($\gamma < 0.001$)。

3. 指導技術項目と技術水準の調査結果

学生が指導を受けた技術項目を分類し集計した結果、表3に示したように、看護問題研究会による「検討会報告」による技術水準に照らし合わせると、14項目中10項目は臨地実習で看護学生が行う基本的な看護技術であった。他の3項目は指導を受けておらず、1項目はその他の内容であった。実施している技術項目の内訳は、水準1が191件(90%)、水準2が21件(10%)で合計212件の項目について指導を受けていた。特に、日常生活に関する援助内容が多く、「バイタルサイン測定」24件、「食事介助」22件、「オムツ交換」16件、「全身清拭」15件、「入浴介助」・「リネン交換」・「口腔ケア」14件と続く。一方、「ルート交換」・「喀痰吸引」・「おやつ介助」・「環境整備」($P < 0.001$)は指導件数としては有意に低い。「寝衣交換」・「体位変換」・「トイレ誘導」・「陰部洗浄」と続いて低かった。

4. 自由記載に関する調査結果

アンケートの自由記載内容を整理した結果、83件の記述があった。「計画発表や報告時の困難」の問いについては16件、「援助や処置中の対応の困難」の問いについては12件、「患者からの不満や苦情」の問いについては2件、「学生の実習記録への興味」及び「実習記録を読んだことがある」の問いについては6件、「学生について感じたこと先輩として自分に気付いたこと」の問いについては47件であった。各問いから出された意見を集め、再度見直しを行った。

そして、記述内容を小カテゴリーに分類し、中カテゴリー・大カテゴリーへと統合した結果、表4に示すように、看護者の「指導への意欲」に関する内容が24件(29%)、学生の「実習への意欲」に関する内容が19件(23%)、学生の「行動計画の具体化」に関する内容が18件(22%)、学生の「周囲への配慮不足」に関する内容が15件(18%)、看護者の「指導時の対応」に関する内容が7件(8%)であった。従って、自由記載の内容は5つの要素で構成されていることが分かった。

IV. 考 察

臨床において煩雑な業務を抱えながら学生に視線を

向けることは、更に煩雑さが増大することを意味する。そして、学生が実習を円滑かつ効果的に展開できる背景には、実習指導者をはじめ病棟スタッフの大きな努力の存在がある。従って、学生への関わりにおける困難について実態を把握することは、実習指導者および病棟看護者の関わり方や今後の指導方法について示唆を得ることに有効であると考え、検討を試みた。

1. 看護職における学生への看護技術指導

老年看護学実習において、92.5%の看護者が学生に何らかの関わりを持っていることが分かった。関わりのきっかけとなった援助技術は25項目で、延べ件数は212件であった。そして、看護問題研究会で示された「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術水準」による分類に合わせて、学生が受けた指導技術水準を確認すると、水準1の技術が90%、水準2の技術が10%で、圧倒的に水準1が多いことが明らかになった。水準1は、「教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの」である。水準2は、「教員や看護師の指導・監視のもとで学生が実施できるもの」であり、水準3は、「学生は原則として見学する」項目となっている。

これらのことは、実習病棟の形態が高齢者を中心とした一般病棟と療養病床型による実習であることが影響していると考えられる。また、先行研究において、老年看護学実習の技術習得状況の実態を明らかにした研究結果から、半数以上の学生が実施した技術は日常生活援助技術とバイタルサイン測定の項目であった⁶⁾とする報告に一致する。さらに、褥創処置や経管栄養、高カロリー輸液のルート交換、気管カニューレ装着患者の気管内吸引など、水準2に相当する技術の学習も行っていることが明らかにされた。しかし、検査に関してはほとんど学習する機会がなく、与薬技術に関しては薬剤師の業務役割により学生は見学と作用・副作用の観察が主な実習内容になっている。

今後の課題は、与薬方法や検査技術など少ない援助技術に関する学習方法の工夫が必要である。

2. 実習指導を困難にする学生との関わりの内容

本研究において、学生への関わりによる病棟看護者の困難は5つの大カテゴリーから構成されていることがわかった。

「指導への意欲」は、「学習不足への指導」、「実習記録への関心」、「肯定的指導」、「自己成長への意欲」に

表4 学生について感じたこと先輩としての気づきに関する内容

n = 40

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
1. 指導への意欲 24(29%)	1) 学習不足への指導	分からないことがあれば積極的に聞いてほしい(3) 病名と状態のつながりを理解してほしい(2) 加齢現象について実習を通して再確認してほしい(2) 事前学習を充分行って臨んでほしい(2) 明るく1つ1つ丁寧にゆっくりと計画を実行して頂きたい(1) ケアの意味、理論的な部分を学習してほしい(1) 学生は何を提供するかを考えるが見守りも重要である(1)
	2) 実習記録への関心	どんなことが書いてあるか知りたい(1) どのような視点から患者と接しているのかを知りたい(1) 学生が何を計画しているか分からないので読みたい(1) 職員に話さないことを記録にあるのではないか(1) 患者をみる視点がおもしろい(1) 情報収集・アセスメントが弱い(1)
	3) 肯定的指導	毎日の行動計画に真面目に取り組んでいる姿に感心した(1) 良くできるよう努力している姿勢は好感がもてる(1) 技術的な面は事前学習ができてきている(1) 実習時間が少ない(1)
	4) 自己成長を伴う意欲	学生に教えることが自分の成長に繋がる(1) 自分もタメ語で話さないようにしように注意する(1)
2. 実習への意欲 19(23%)	1) 積極性の不足	積極的な態度がみられない(3) 時間厳守で行動してほしい(2) 実施後すぐに簡潔に報告してほしい(2) 若さがやる気につながるのではないか(1) 時間の無駄が多い(1) 学生はもっと自信をもっていい(1) 質問してもなかなか答えられず時間がかかり困った(1)
	2) 実習意欲の個人差	患者さんにしきりに声掛けをする学生とそうでない学生がいる(3) 職員が接するときより生き生きしているのを見て余裕を感じた(1) 明るくハキハキ答えられ、挨拶できる子はやる気を感じる(1) グループによって差がありすぎる(1) 実習後半の学生に知識の個人差がある(1) 医師に勝手にどんどん質問している(1)
3. 行動計画の具体化 18(22%)	1) 行動目標の明確化	何を求めているか分からない(4) 何を目標にケアをしているか分かりにくい(3) 何を学びたいのかこちらに伝わらない(2) いきなり見学させてほしいと言うことがある(1)
	2) 行動内容の具体化	患者の状態に応じた行動計画になっていない(3) 清潔操作ができない(1) 知識や技術が不足で説明しても理解できない(1)
	3) 行動計画の明確化	1日に出来ることを計画してほしい(2) 行動計画を簡潔に伝えて欲しい(1)
4. 周囲への配慮不足 15(18%)	1) 病棟看護師への配慮	私語が多い(4) 勉強させて頂いているという謙虚な姿勢が不足している(2) 机の周りに多数の学生がカルテを使用しているとき困る(1) 分からない時は「分からない」「勉強してきます」などが言えない(1) 職員の行動をよくみて忙しいときは指導者に報告してほしい(1) 臨床では患者が最優先なので援助の順序変更はできない(1) 目上の人に対する対応が悪い(1)
	2) 患者への配慮	親しくなろうとする言葉使いがタメ語ではよくない(2) 患者が休養したいときに休めないことがある(1) 患者への言葉づかい、対応が適切でない(1)
5. 指導時の対応 7(8%)	1) 処置時の対応での困難	質問にどのように答えたらよいか困る(1) 学生主体でやって欲しいが自分が主体となってしまう(1) 説明する時間がたりない(1) 血圧の高い患者に何回も測定をしている(1)
	2) 指導内容の明確化	どこまで指導してよいか分からない(1) どこまで職員が関るか分からない(1) 基本ははずれない応用を教えるのが分からない(1)
83(100%)		

件数 (%)

関する内容から導かれた。これは、学生の受け持ち患者の病態生理、個別性のある援助技術に関する事前の学習不足への指摘であり、患者の理解と根拠を基にした計画立案による援助展開が可能になるように指導する意欲が存在していると考え。また、看護師の実習記録内容への興味や努力している姿勢への承認、更に自己成長への期待感が含まれている。

〔実習への意欲〕は、「積極性の不足」、「実習意欲の個人差」に関する困難から導かれた。これは、学生の実習への態度に積極性がみられず、時間を無駄にしているなど個人差への指摘であり、明るく挨拶をする学生にやる気を感じ取り、多くの学生にそのような実習をして欲しいという思いがあると考える。

〔行動計画の具体化〕は、「行動目標の明確化」「行動内容の具体化」「行動計画の明確化」に関する困難から導かれた。これは、一日の行動計画から何を学びたいか、何が必要な援助か、どれだけできるかが実習開始の段階で明らかにされていないことへの指摘であり、受け持ち患者に合った計画を提供してほしい思いの現れであると考えられる。

〔周囲への配慮〕は、「病棟看護師への配慮」、「患者への配慮」に関する困難から導かれた。これは、私語が多く患者への状態の理解や病棟看護師に対する配慮や謙虚な姿勢が見られないことによる学生の言動への指摘であり、積極性を持ち、明るく、病棟スタッフや患者に対する感謝の気持ちを持ち、表現できるよう身につけることで相互関係が良好になり、学習効果をあげる可能性を含んでいる。

〔指導時の対応〕は、「処置時の対応困難」「指導内容の明確化」に関する困難から導かれた。これは、学生の質問にどのように答えたらよいか困り、どこまで指導してよいか分からないことによる指摘であり、病棟内で実習指導者を中心とした指導内容を共通理解することや折りに触れて相談しあうことにより困難を緩和する可能性があると考え。

これらのことから、指摘に対する善処の可能性を具体的に実践することで病棟看護師の困難は解消するという観点から考えてみた。実習意欲や周囲への配慮は現場で起こる動的な事柄であり、解決の糸口も現場にある。特に、実習への意欲は、学習意欲が単独で存在しているものではなく、学習意欲がないから学習効果が上がらないという直線的な関係でもなく、意欲のない学生にだけ学習効果の上がない原因があるわけではない。これは、学生が熱心に学習活動を行う結果と

して学習効果が上がり意欲も連動するという関係がある。それには、まず学生が熱心に学習活動を行うことを最優先すべきであると同時に、病棟看護師は、患者への援助を通して看護師として適切な援助効果による満足感を生み出すことである。学生もまた満足感を受ける体験をし、共に意欲が上昇する実践を可能にすると考え。

実習態度に関する先行研究において、病棟看護師にとって実習生に求める積極的な態度や学生らしい態度などは、学生がすでに持っているべき資質を問われていると考えられており、指導して導いていくものとは考えられていない⁶⁾、と言われている。言葉遣いや立ち振る舞いは実習以前に身につけているものと考えよりも、指導によって導くという認識が必要である。また、学生が最も多く困ったと思った看護援助に関する研究において、排泄場面でも食事場面でもコミュニケーションによる困りが最も多い結果を得ている^{7~9)}。言葉遣いが悪く気が利かないなどの学生の配慮不足は、高齢者の微妙な状況の変化や心理的变化へのコミュニケーションが困難であると感じていたのではないかと考える。このような高齢者への対応は、身体機能が低下し、心と体の統合の崩壊にさらされながら何らかの秩序と意味を維持しようとしている老年期の対象者⁹⁾にどのように配慮するかが求められていたことになり、難易度が高い対応の技術となる。このことから、適切な声かけによるサポートは、学生の思考を揺さぶり、患者への関心や実習への意欲の源となると考える。

また、指導時の対応困難は、病棟看護職自身の内面的な困難を含んでいると考え。それは、先輩としての自分を向上させ、良い実習指導を行うようにしようとする意識の現れであると捉えることができる。指導する際に必要なことは、学生の自己決定を尊重し、学生に主体的な学びが進んでいくように助言することや役割モデルになることが必要である¹⁰⁾。ここでいう役割モデルとは、看護師が患者と向き合い誠実に根拠のある看護を実践している姿であり、そのような看護を普段から実践する自分の後ろ姿を見せることが含まれる。看護学実習では、患者に現れている現象も、病棟スタッフや教員が示す言動も教材となる。また、学生と指導する看護師が真剣に向き合い、患者について検討を重ねることが学びを深めると考える。

従って、病棟看護師の役割は、学生に対して役割モデルを提示することであると言える。また、実習指導者の役割は、学生への指導と病棟スタッフへの指導上

の問題点の把握や助言、更に、看護者が自分らしい援助をリラックスして実践し、実習指導に当たることができるように配慮することが重要である。

4. 研究の限界と課題について

病棟スタッフの指導上の困りに関するアンケート調査から貴重な意見を得ることができ、回収率100%という協力を得た。今後は、概観した結果をもとにアンケート内容を更に吟味し、個々の技術や援助場面における意見を収集し、内容の検討を重ねて行きたいと考える。

V. ま と め

本研究では、H病院の看護者40名にアンケート調査を実施し、病棟看護者側から見た看護短期大学生への指導の一側面を明らかにした。そして、病棟看護者の関わりにおける困難について分析し、今後の指導方法への示唆を得るために検討を試みた。

1. 病棟看護者の学生との関わりは93%と多く、学生との関わりが多いほど指導に関する困難は多いが、困難を伴うだけでなく、自己成長につながる利点があると感じていることが分かった。職種間による関わり率に差はなかった。
2. 病棟看護者は、看護者の[指導への意欲][指導時の対応]、学生の[行動計画の具体化][実習への意欲][周囲への配慮不足]について困難を感じていることが明らかになった。
3. 学生が指導を受けている看護技術の90%は、学生が単独でできる水準1の項目であり、水準1の全体の77%をしめていた。水準2が10%で、水準3は指導を受けていなかった。
4. 病棟看護者の役割は、学生に看護の役割モデルを提示すること、援助効果による満足感を共有し学習意欲をサポートすることである。
5. 実習指導者の役割は、学生指導、病棟看護者の問題把握や助言、さらに病棟看護者自身が満足する援助を通して学生に関わることができるよう配慮することである。

VI. 謝 辞

ご多忙の中、アンケート調査にご協力頂きましたH病院の院長先生はじめ職員の皆様に深く感謝申し上げます。

VI. 文 献

- 1) 杉森みど里：看護教育学第3版—看護学教育方法論—。医学書院：1999：pp.173-286.
- 2) 明石恵子・水溪雅子：臨地実習教育学習効果と課題。看護教育 38(2)：1997：pp.112-117.
- 3) 佐藤玲子・長根彩子・櫻井美代子：老年看護学臨地実習の教育内容に関する検討—看護技術の習得方法と実習評価について—。日本老年看護学会 2003：p435.
- 4) 阿部 緑・煙山晶子・小笠原サキ子：病棟看護師の老年看護実習指導における学生に期待することの分析。秋田大学医学部保健学科紀要 12(2)：2004：pp.158-166.
- 5) 笠井恭子・吉村洋子・寺島喜代子：老年臨床看護学実習における看護技術の習得状況と自己評価との関連。老年看護学 11(1)：2005：pp124-133.
- 6) 森下路子：看護学実習の意義と指導者のあり方に関する質的研究—実習指導者講習会受講者のレポートの分析—。日本看護学教育学会誌 11(3)：2002：pp.1-16.
- 7) 青木律子・安藤邑恵・服部紀子：老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った看護援助の分析—排泄への援助の内容とその対処—。看護教育 (36)：2005：pp.158-160.
- 8) 服部紀子・青木律子・安藤邑恵：老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った援助内容の分析—「飲食」への援助に焦点をあてて—。看護教育 (36)：2005：pp.105-107.
- 9) 八島妙子・渡邊智子・木村寿美：高齢者と学生の対話による学習効果。愛知医科大学看護学部紀要 (3)：20048：Pp.81-84.
- 10) 藤岡完治・村島さい子他：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック。医学書院。東京：1996。pp.2-12.